朝鮮柔道史の研究序説

小　野　勝　敏

はじめに
1. 近代柔道の導入と柔道場
　1）近代柔道の伝達者
　2）京城における柔道場
2. 韓国人の講道館入門
3. 講道館朝鮮支部の創設と変遷
　1）講道館朝鮮支部の誕生
　2）四大道場の解散と「朝鮮柔道連盟」の設立
　3）講道館朝鮮支部の朝鮮研武館への移管
　4）大韓柔道会と韓国柔道院の設立
おわりに

はじめに

朝鮮[1]の近代柔道の始まりについては，「柔道は嘉納によってスポーツ化され近代柔道となったが，それを逆輸入したのは1909年」[2]と述べられている。

この内容によれば，朝鮮における1909（明治42）年以降の柔道は，嘉納治五郎師範が明治15（1882）年に創設した講道館柔道を導入し学んだことになる。しかしそれ以前，すなわち1909年より前の日本柔道は，逆に朝鮮より日本へもたらされたもの，という意味に解せられる。1909年以前に朝鮮が日本へもたらしたという柔道伝来説については，すでに世に問うているので，ここでは言及しない[3]。

本稿では，日本から朝鮮へ近代柔道が伝播した20世紀の初頭から，なかでも1910年の日韓併合より，日本の敗戦によって朝鮮が解放される1945年までの36年間におよぶ植民地時代における朝鮮，とりわけ京城（現ソウル特別市）における柔道発達史について究明することを目的としている。とくに，講道館柔道がどのような変遷・経緯を経て京城の地に深く根をおろすようになるかを，「講道館朝鮮支部」（以下「朝鮮支部」と略記する）の沿革を紐解きながら考えてみる。

しかし，朝鮮柔道発達史に関する資料の蒐集は，未だに不十分であるので，残念ながら一つの試論を提供するにすぎない。この小稿によって今後，多方面での本格的な論争の基盤を少しでも提供できるならば，望外の喜びである。

それではまず，日本から朝鮮へ伝播した近代柔道のことからみていくことにしよう。

1. 近代柔道の導入と柔道場

1） 近代柔道の伝達者

朝鮮へ最初に近代柔道を伝達した人物と時期については，二説が考えられる。一つは，青柳喜平説であり，二つは，内田良平説である。まずは，青柳説からざっとながめていこう。

① 青柳喜平説

1908（明治41）年11月7日の『京城新聞』に，青柳について，つぎのような記事がみられる。

「柔道教師青柳喜平氏嘗て京城に於て柔道の師範をなしたる同氏は今回韓国十三道を跋渉し京城に来られ大和町一丁目神崎福次郎氏方へ滞在せら

る」[4]

この新聞記事には，青柳が，いつ，どこへ，だれと，どのような用務で韓国13道を巡回したのかについての具体的な言及はされていない。しかし文意より，1908年初冬より以前に，青柳が京城で柔道の師範をしていたことは明らかである。したがって通常は，柔道の普及奨励のための巡回である，と推論できよう。

李瑄根（이선근）の『大韓国史』には，

「柔道は1907年日本人である青柳によってわが国に紹介され，一番最初に公開されたのは，1908年3月に内閣園遊会主催のもとに，秘苑で開催された韓日両国警察柔道競技であった」[5]

とある。

申元永（신원영）編『韓国体育百年史』[6]および『大韓体育会史』[7]においても，青柳のことについては，上記で引用した『大韓国史』とほぼ同じ内容となっている。他に，ソウル大名誉教授の羅絢成（나현성）も「わが国には，光武年代（1897—1907年—引用者）に日本人青柳喜平により伝来した」[8]という。また，韓国教員大の林栄茂（임영무）[9]，東亜大の鄭三鉉（정삼현）[10]もほぼ同様の見解である。

このように，上記論文は，多少のニュアンスの相違はあるが，青柳を朝鮮へ近代柔道を紹介した最初の人物とし，その時期を1907（明治40）年としている。しかし，いずれの論文も残念ながら，その論拠の出所を明らかにしていない。また，朝鮮で最初に公開された柔道競技については，1908年3月28日に秘苑で開催された日韓両国の警察官によるデモンストレーションとしている。ただし，青柳がこの公開柔道競技に関与したかどうかについては，はっきり分らない。このことは，後に少しみることになる。

では，この青柳はいかなる柔道歴を有する人物なのであろうか。つぎに，彼の略歴を掲げてみる。

青柳は，

「明治4（1871）年10月18日に福岡市で誕生。同18（1885）年8月14日，双水執流舌間道場に入門。同28（1895）年2月14日，24歳で免許皆伝となり，双水執流第14代を継承。同36（1903）年7月2日，渡朝し林権助公使の依頼により道場を開設[11]。同38（1905）年，大日本武徳会乱取形制定委員会の委員に就任。同42（1909）年8月，京都で開かれた大日本武徳会の第11回青年大演武会の柔術之部の審判を務める[12]。大正15（1926）年5月7日，柔道範士となる。昭和4（1929）年8月25日，59歳で死去。」[13]

上記のように青柳は，双水執流の第14代の家元であり，明治39（1906）年7月24日，京都の大日本武徳会本部で開催された「武徳流柔術新形制定委員会」に参加した10流派20名のうち，双水執流の代表者として出席した著名な柔術家である[14]。

このことは，青柳の双水執流が当時の柔術界を代表する一つの流派であることを意味している。また，その流派の師範としての実力も兼ねそなえてい

表1 「武徳流柔術新形制定委員会」に出席した流派と氏名

流　派	参加人員	氏　名
講道館流	6	嘉納治五郎，山下義韶，磯貝一 横山作次郎，永岡秀一，佐藤法賢
竹内流	3	竹野鹿太郎，今井行太郎，大島彦三郎
揚心流	3	平塚葛太，戸塚英美，片山高義
関口流	2	関口柔心，津水茂吉
不遷流	1	田辺又右衛門
三浦流	1	稲津政光
扱心流	1	江口弥三
四天流	1	星野九門
竹内三統流	1	矢野広次
双水執流	1	青柳喜平

注(1) 松本芳三編『柔道百年の歴史』1970年，117頁より作成。
(2) 参加10流派のうち講道館を除く諸流派は，すべて柔術。

るものと考えられるので，朝鮮での柔術の紹介・指導も可能であった，といえよう。

現在のところ，青柳と朝鮮柔道との係わりは，上記で引用した『京城新聞』と若干の論文の他に，すでにみた，「林権助の依頼で，1903年に柔道場を開設した」ことしか判明していない。しかし，青柳が朝鮮で柔道場を開設した1903年および1907年頃は，年齢が35歳前後で，指導者としても脂が乗っている時期でもあるし，郷里・福岡は地理的に朝鮮・韓半島に近いこともあり，時々柔道の指導・普及のために渡朝がなされたとしても，ごく自然のことといえよう。

実は，上記で引用した新聞などの他に，のちにみる『京城日報』にも青柳と朝鮮柔道との係わりが少しみられるが，それら以外に，こののち，青柳と双水執流の名前は朝鮮柔道史上に一切現われてこない。青柳の双水執流は，福岡という地方の一流派にすぎなく，組織も全国的な規模ではなかった。結果的に，朝鮮における双水執流は青柳のみで終始し，滞在期間もさほど長くなかった可能性もあり，そののちは全国的な組織と多くの門弟を有する講道館柔道に，質と量で圧倒されるのである。

② 内田良平説

漢陽大の李学来（이학래）教授は，朝鮮への近代柔道の最初の伝達者について「1906年，日本人内田良平により伝来」[15]と述べている。他に，京畿大の李洪鍾（이홍종）[16]も，この内田説を支持している。

この論拠は，昭和2年2月2日の『京城日報』に掲載された阿部文雄[17]の「京城柔道発達史（二）」なる論文に依拠していると思われる。

この阿部論文には，

「明治39年，明治町（現明洞―引用者）の或る日本建の工場を利用して道場を設けた。その広さは三十畳ばかりで，初めの程は二三十人の稽古人であったといふことである。教師としては内田五段の外巡査に初段志賀矩氏

あり実業家青柳某氏（他流）もまたあづかった」[18]

「京城に講道館柔道の道場を創始した月桂冠は誰の手に落ちるかといへば，これは当時統監府嘱託五段内田良平氏に帰せざるを得ない（下略）」[19]

とある。

以上のように，内田には，朝鮮で最初に講道館柔道の道場を創始した名誉が与えられるけれども，この文中では必ずしも，朝鮮へ近代柔道を最初に伝達した人物たる位置づけがなされているわけではない。しかし，先にみた李学来や李洪鍾は，なぜか1906年の内田良平説の立場を支持している。何をその論拠にしているのかは，青柳説と同じように，史料や出所が一切明らかにされていないので，不明である。

ここで，内田と朝鮮との係わりについてみてみよう。

「明治7（1874）年2月，福岡市に誕生。明治21（1888）年，15歳のとき玄洋社の明道館で柔術の修行をし，翌明治22年には，天真館と称する柔術道場を設立する。明治25（1892）年6月26日に講道館に入門し[20]，柔道を学ぶとともに，東洋語学校に入校し，ロシア語を学ぶ。明治29（1896）年春に再びウラジオストックへ渡航し，同地に柔道場を開設し，柔道の指南をする。日露戦争後の明治39（1906）年3月に韓国統監府の嘱託として，初代統監の伊藤博文に随行して京城に赴任する。明治42（1909）年12月，36歳のとき，韓国を退去。昭和2年7月26日，64歳にて逝去。」[21]

周知のように内田は，彼地で親日御用団体たる一進会の顧問として，1910年の日韓併合のための裏面工作を強力に推進した人物でもある。このように内田は，純粋の柔道家というよりも，柔道を大陸侵略のための隠れ蓑的に利用した右翼の指導者としての側面を強く内在した人物といえよう。したがって，彼は，現在の韓国において，豊臣秀吉，加藤清正，伊藤博文と並んで極悪人の烙印がおされている。

ここで少し，内田と青柳との係わりについてみてみよう。

内田が明治25年6月に講道館へ入門したのちに，時々郷里・福岡へ帰省

をしては，彼が道場主である天真館の館員に指導をするかたわら，当時市内にあった他流との試合をよくしたようだ。その試合の相手に，双水執流の青柳がいて，最初は互角の勝負であったが，明治27（1894）年になると，青柳はもはや内田に歯が立たなかった[22]，という。

このように両者は，同郷ということや，若かりし頃はお互いに勝負をしたこともあり，渡朝する以前から昵懇の間柄であったと推論できる。それゆえ，すでにみた『京城日報』でいう「実業家青柳某氏」とは，青柳喜平のことであり，青柳が内田の明治町道場経営・指導の手助けをした，と推論したほうが自然といえる。

これら二説のうち，どちらの頭上に最初の伝達者としての凱歌を挙げるべきかの判断は，基礎史料がたいへん乏しいことから困難である。それゆえここでは，これ以上の詮索をせずに，二説の紹介のみに留め置くこととする。しかし取り敢えず，朝鮮における近代柔道は，日本から伝えられたものである，ということだけは確認しておこう。

2） 京城における柔道場

① 日本人経営の柔道場

もうすでにみたように，内田は，1906年3月韓国統監府の初代統監・伊藤博文の赴任に随行して京城に着任した。早くもこの年の12月に，柔道場を明治町に設立した。実は，内田にとってこの渡朝は4度目[23]であった。したがって，伊藤の援助もあったであろうが，このような短期間に道場開設が可能になったものと考えられる。

周知のように，日本は韓国を植民地として併合する以前に，韓国を国としての機能を奪うことを目的として，1904（明治37）年に第1次日韓協約，翌1905（明治38）年に第2次日韓協約そして1907（明治40）年に第3次日韓協約を締結する。1909年の伊藤博文の暗殺を契機にして1910年8月には，大韓帝国を併合し日本領内に編入するのである。

内田が韓国へ近代柔道を伝播した1906年12月は，韓国が日本によって国の機能を奪われつつあったたいへんな時期であった。その頃から，1910年の日韓併合までの足掛け5年の間に，京城に創設された日本人経営の柔道場は相当の数となる。

1910年までの京城における柔道場の開設は，先にみた，1906年12月に明治町に設けられた内田道場を嚆矢として，1907年の東洋協会道場，1908年の龍山停車場内道場，1909年の養武館，1910年の警察および監獄側道場，修道館，私設道場たる養神館そして西大門監獄道場，永楽町道場と続き，かなりの数の道場が次々と新設される[24]。これらの道場の流派は，講道館柔

表2　1910年以前の日本人経営の柔道場

道場名	設立年度	備考
内田道場	1906（明治39）年	内田良平は，明治町に30畳ばかりの道場を設け，志賀 炬，青柳喜平の協力を得て柔道教授をしたが，明治41年頃閉鎖。
東洋協会道場	1907（明治40）年	大和町の東洋協会専門学校分校にあった道場で，在学生が中心であったが永続しなかった。
龍山停車場構内道場	1908（明治41）年7月	鉄道管理局員として来任した肝付宗次によって，約60畳の道場で鉄道局員とその子弟に教授。
修道館	1910（明治43）年春	東洋協会道場を韓国政府司法部の菊地剛毅，岡田勝利（のちに講道館朝鮮支部幹事）の発起で借りうけ，司法部員と東洋協会専門学校分校生徒を中心とした道場。大正2年4月頃まで存続。
磯野養武館	1909（明治42）年頃	磯野信夫により，長谷川町に開館，のち明治町に移転。大正3年改築し，道場を24畳にした。
肝付養神館	1910（明治43）年夏頃	肝付宗次が岡崎町に開館，のち羽衣町に移転したが，久しからずして閉館。
永楽町道場		稲田某の道場で，講道館でない他流の経営。
本町四丁目道場		設立年度，設立者名は不明なれど，道場は本町四丁目にあった。
警察及監獄道場	1910（明治43）年春頃	警察官には清水重華（のちに講道館朝鮮支部幹事）と肝付宗次が，刑務所は，永楽町道場の稲田某が指導。明治45年に渡辺福蔵が京城中学校より監獄長となって転勤して以降隆盛となる。

注(1)『京城日報』昭和2年2月2日—2月3日および『柔道』第4巻第10号，大正7年，30—34頁より作成。

表 3　1910 年以後の日本人経営の柔道場

道場名	設立年度	備考
警官練習所道場	1911（明治 44）年	初期は肝付宗次が，大正 6 年 8 月より波来谷乗勝（のちに講道館朝鮮支部世話係）が指導。この頃，京城内の各警察署に道場が設けられ，漸次，朝鮮各地の警察署に普及。翌 7 年 5 月，肝付は病で辞任，吉武雄一が後任。同年中に 100 畳の道場が完成（予定）。
京城中学校	1912（明治 45）年 4 月以前	明治 45 年 4 月以前は，肝付宗次と清水重華の指導をうけ，道場は 80 畳ぐらいであったが，同年 4 月武徳会から渡辺福蔵（のちに講道館朝鮮支部世話係）を招聘。大正 2 年 9 月から柔道が正科となり，同年 10 月に岡村豊作（のちに講道館朝鮮支部世話係）を教諭として採用。道場は，132 畳（大正 6 年 11 月現在）。
憲兵隊司令部道場	1911（明治 44）年	大正 4 年以降，部内の警察官に柔道を課し，肝付宗次を柔道教師に，清水重華をその補佐とした。講道館朝鮮支部は，設立後約 6 ヵ月間，この道場を借用した。
講道館柔道研究会	1914（大正 3）年秋	和泉町の竹内流中松某の道場を福 尚志（のちに講道館朝鮮支部幹事）が譲りうけたのが，研究会の濫觴。肝付宗次が師範。3 年後に設立される「講道館朝鮮支部」の前身組織。
武術会	1914（大正 3）年春	朝鮮総督府職員によって組織され，当初は肝付宗次の指導をうけ，憲兵隊司令部道場で稽古。
郷右近道場	1914（大正 3）年 5 月	北窓流の郷右近良助により，龍山漢江通りの自宅に設けられた道場。
鉄道武術館	1915（大正 4）年 8 月	上記にみた龍山停車場構内道場（明治 43 年頃不振）の流れをくむ組織。新たに道場を移転増築し，名称を変更。
振武会	1916（大正 5）年暮	京城の本町警察署長・宮館貞一が署員の武術奨励のために署内に設けた組織。講道館柔道研究会は，会員が多数になったので，上記和泉町道場より，この本町警察署道場に移動。講道館朝鮮支部の設立まで借用。
京城倶楽部柔道部	1918（大正 7）年	京城内の官公庁へ勤務する職員によって構成され，練習場は憲兵隊司令部道場。岡村豊作，岡田勝利，渡辺福蔵，波来谷乗勝，福 尚志，清水重華が指導。部員 44 名。
講道館朝鮮支部	1917（大正 6）年 11 月 15 日	設立後は憲兵隊司令部道場を借用したが，大正 7 年 6 月，黄金町道場（59 畳）の新設。昭和 3 年 5 月 27 日，長谷川町に 314 畳の道場を建設。昭和 20 年 9 月，朝鮮研武館道場となる。

注 (1)『京城日報』昭和 2 年 2 月 4 日—2 月 6 日および『柔道』第 4 巻第 10 号，大正 7 年，34—39 頁より作成。

(2) 講道館朝鮮支部世話係とは，財団法人講道館支部規則第 5 条に，「道場ニ指南役ヲ置キ支部長之ヲ推薦ス，指南役ハ柔道ヲ教授ス，支部長ハ指南役ヲ補佐セシムル為指南役補佐及世話係ヲ置クコトヲ得。」という。

道が主流であったが，なかには，講道館以外の他流道場も存在していた。

このように，日本の統治が実質的に開始される1910年頃には，講道館柔道の朝鮮進出もほぼその基盤を着実に整えていたといえる。

その後，1911年に警官練習所道場，京城中学校道場，憲兵隊司令部道場，1914年秋にはのちに「朝鮮支部」の前身となる講道館柔道研究会が新設される[25]。最終的には，1917年に「朝鮮支部」が創立されることによって，朝鮮における講道館柔道の土台は盤石のものとなる。この「朝鮮支部」については，のちに詳しくみることになる。

② 朝鮮人経営の柔道場

1910年の日韓併合までに，京城の地に日本人経営の柔道場がかなり進出していたことは，すでにみたとおりである。では，朝鮮人による柔道の指導状況は，どのようであろうか。つぎに，それをみてみよう。

この状況をみる前に，韓国において柔術なる用語が何時頃から使われ始めたのであろうか。まず，このことから入っていこう。

李朝第26代の国王である高宗の『高宗実録』の光武10（1906）年2月の条で，回還大使・李載完（이재완）は，国王につぎのような報告をしている。

「日本の学校を見ると女子も体操をし，男子は体操のほかに柔術，撃剣の技術がありました」[26]

李洪鍾教授は，この『高宗実録』の柔術という用語の記載が，近代韓国柔道史上における最初である，という。さらに，この柔術なる用語は，甲午改革（1894年）以前には使用されていなかった[27]，という。この論拠の裏づけについては，何も説明がなされていないけれども，先にみた1909年以前における日本の柔道は我が韓国からもたらされたもの，という以上，この見解は如何なものであろうか。韓国柔道起源説は空論となる。矛盾に満ちた論拠である。批判的に紹介せざるをえない。

少し横道に逸れた嫌いがあるが，本題へ戻り，朝鮮人による柔道の指導状

況をみていこう。

韓国における最初の柔道公開競技は，先にみた1908年3月28日の午後3時から市内の秘苑で開催された内閣園遊会における日韓両国の警察官によるデモンストレーションであった。このことについては，同年同月同日付の『皇城新聞』の雑報欄に，内閣主催の園遊会についてつぎのように記載されている。

「園遊会節次

余興開始順序

（中略）

撃剣　　午後二時四十分開始

柔術　　午後三時開始

（下略）　」[28]

この雑報には，ただ午後3時から柔術が披露されることが記されているのみで，上記でいうところの警察官による柔術のデモンストレーションがなされたかどうかの判断は，先と同様に出所が掲げられていないこともあり，きわめて難しいことである。

1908年9月には，武官学校生徒のみならず，同校の軍人倶楽部で一般人にも習射，乗馬，撃剣の他に柔術がなされた[29]。

1909年には，中央基督教青年会体育部に劉根洙（유근수）と羅寿泳（나수영）を招聘して，韓国に初めて柔道場を新設した。このキリスト教の体育事業には，柔道のほかに，バスケットボール，ボクシングそして体操の4部が中心的になされていた[30]。

1912年10月7日には，朴承弼（박승필）の主催する柔角拳闘クラブにおいても柔道競技が行なわれた。

1916年5月になると，市内楽園洞にあった「五星学校」に柔道場が設置され，在校生のみならず一般人にも柔道の指導がなされるようになる[31]。

1921年には，姜楽遠（강낙원）の「朝鮮武道館」，1923年に韓軫熙（한진희）

の「朝鮮講武館」そして1931年に李景錫（이경석）の「朝鮮研武館」が開設される。これら三つの道場と上記の「中央基督教青年会」の柔道場を合わせた四つが四大私設道場といわれ，1938（昭和13）年に「朝鮮支部」に強制的に統合されるまで，朝鮮人による独自の経営と指導がなされることになる。この四大道場が強制的に「朝鮮支部」に統合・吸収されることについては，のちにふれることになる。

表4　朝鮮人経営の柔道場

道場名	設立年度	備考
軍人倶楽部道場	1908（明治41）年9月	武官学校長李熙斗，学務局長尹致旿の発起
中央基督教青年会道場	1909（明治42）年	中央基督教青年会館
鳳鳴学校道場	1909（明治42）年12月	鳳鳴学校
柔角拳倶楽部道場	1912（明治45）年	朴承弼
五星学校道場	1916（大正5）年5月	私立五星学校
朝鮮武道館	1921（大正10）年11月	姜楽遠，韓彰熙，韓軾烈の発起
朝鮮講武館	1923（大正12）年10月	韓彰熙
朝鮮研武館	1931（昭和6）年	李景錫

注(1)『大韓体育会史』1965年，35頁参照。
(2) 李洪鍾『한국유도사』1984年，206，208頁参照。
(3) 李炳益『韓国柔道史의研究』1977年，26—28頁参照。

2. 韓国人の講道館入門

1906年の内田と1907年の青柳が韓国に近代柔道を伝播する以前に，実は8名の韓国人が講道館に入門している。

『講道館館員名簿・第一』[32]（以下『名簿』と略記する）によると，1901（明治34）年12月22日付で慎順晛（24歳），全永憲（27歳），金益相（24歳）の3名，1902（明治35）年2月2日に宋再観（29歳），柳東建（24歳），同年8月10日に韓圭復（24歳）の3名，1903（明治36）年8月30日に柳東秀（24歳）と劉銓の2名，合わせて8名の韓国人が講道館に入門している。この『名簿』には，入門し

た韓国人の氏名，入門年月日，年齢，本国の住所そして戸籍筆頭者の氏名が記載されていて，1906年以前の入門者は8名である。この事実は，内田と青柳によって近代柔道が伝えられる以前，すでに8名もの韓国人が講道館に入門しているということを意味している。

講道館に入門した8名のうち，全永憲と韓圭復と宋再観の3名については『大韓帝国官員履歴書』[33]によって，若干の経歴を明らかにすることができる。

全永憲（전영헌）は，1875年12月24日生れで，講道館に入門したときは満26歳であった。日本には，1901年3月に陸軍副尉を休職して来日。同年9月，成城学校（現成城大学）で日本語を学んだのち，同年12月に同学校の政治学科へ入学する。1902年5月には，近衛歩兵第二連隊に入隊，同年12月に陸軍士官学校に入校し，1903年11月に同校を卒業している。同校を卒業と同時に，近衛歩兵第二連隊の見習をし，1904年7月に帰国している。

このような経歴の全永憲は，1901年12月22日講道館に入門し，翌1902年5月に近衛歩兵第二連隊に入隊，12月には陸軍士官学校に入校しているので，柔道の修業期間は，最大限2年半くらいと推論できよう。

慶応義塾大学柔道部史によると「陸軍で始めて柔道部を設けて，若い士官連中に稽古をさせたのは，麻布の近衛第三連隊で，明治39年ごろであった」[34]という。したがって，全が第二連隊に入隊中ないしは士官学校に在校中は，そこで柔道の学習ができなかったことになる。全の帰国は，1904（明治37）年7月であるので，柔道を学んだ場所は時間的に講道館しか考えられない。帰国後は，陸軍武官学校の教官になるが，すでにみたように，この武官学校での柔道開始は1908年9月のことである。そして，この柔道開始に先立つこと6ヵ月前に，秘苑において日韓両国の警察官による公開競技がなされている。この事実を無視できない。なぜなら，1904年7月の帰国と同時に武官学校学徒隊勤務に補せられているからだ。武官学校での柔道開始時期は，帰国から4年が経過していて，日本人の内田と青柳の後塵を拝するこ

とになるが，全は何らかの意味でこれらの柔道に係わったのではなかろうか。その結果として，武官学校に柔道が誕生した，と考えるのが自然だからである。また，秘苑での警官による公開競技は，だれがその指導に関与したか一切明らかでないが，時期的に全が係わっていたとしても，決して矛盾しているといえないであろう。ただ残念なのは，史料として何も現存していないことだ。このことは，内田や青柳にも同様のことがいえる。というのは，両者をそれぞれ最初の伝達者とする根拠は何も示されておらず，ただ前記した新聞記事だけに頼っているように思えるからだ。したがって，時期的な側面から考察すると，全が日本から朝鮮へ近代柔道を導入・紹介した先駆者だとしても，あながち誤りとはいえぬであろう。ここに，新史料の発見が待たれる所以がある。

韓圭復（한규복）は，1899年4月に来日。同年9月に神田中学校に入学。翌1900年9月に早稲田大学政治経済科に入学。1903年7月に同大学を卒業。同年8月に帰国し，参謀部翻訳官に就任。講道館入門は，1902年8月10日であるので，1年におよぶ柔道修業の期間があったことになる。

宋再観（송재관）は，1899年4月釜山開成中学校を卒業し，翌5月に東京商業学校へ留学し，1903年4月に同校を卒業している。同学校を卒業した2カ月後の6月，銀行に勤める。したがって，卒業と同時に帰国したものと思われる。この銀行に1年数カ月の勤務後の1904年8月に官立農商工学校教官に任ぜられている。講道館入門は，1902年2月2日，商業学校に在校中のことであるので，1年ぐらいの修業期間といえる。

上記3名の講道館入門の動機や修業状況などは不明であるが，在日中の学歴および帰国後の職業から類推すると，柔道の修業は留学の本来の目的であった，といえないであろう。また彼らが，帰国後，柔道に携わったという史料もない。しかし，前述したように，1906年以前に彼ら3名のみならず，他の5名も入門だけでなく実際に柔道を学んで帰国した可能性もあるので，時代的に彼ら5名にも，韓国への近代柔道の伝達者としての資格が生じよ

表5　韓国人の講道館入門者の経歴

氏　名	日本入国	留学先	講道館入門	帰国	勤務先
全永憲	1900（光武4）年9月	1900年9月 成城学校入学 1901年11月 成城学校卒業 1902年12月 陸軍士官学校入学 1903年11月 陸軍士官学校卒業 1903年11月 近衛歩兵第二連隊	1901（明治34）年 12月22日 （27歳）	1904（光武8）年7月	1904年7月 陸軍武官学校学徒隊附
宋再観	1899（光武3）年5月	1899年5月 東京商業学校入学 1903年4月 東京商業学校卒業	1902（明治35）年 2月2日 （29歳）	1903（光武7）年6月	1904年8月 官立農商工学校教官
韓圭復	1899（光武3）年4月	1899年9月 神田中学校入学 1900年9月 早稲田大学 政治経済科入学 1903年7月 同上卒業	1902（明治35）年 8月10日 （24歳）	1903（光武7）年8月	1904年9月 参謀部翻訳官

注(1)『大韓帝国官員履歴書』286，558，628頁および『講道館館員名簿・第一』160，161，169頁より作成。

う。その意味で，ここでも新史料の発見が待たれる。

このように，1906年以前に8名もの韓国人がすでに講道館へ入門していたという事実は，韓国柔道史の一大エポックとなろう。

つぎに，韓国人以外の外国人の講道館入門状況についてふれておこう。

先に掲げた『名簿』によると，1882（明治15）年の講道館創設時より，1909（明治42）年5月3日までに講道館に入門した外国人は，インド人14名，イギリス人13名，アメリカ人12名，中国人6名，フランス人とカナダ人各1名の計47名である。先の韓国人8名を加えると55名となる。

ちなみに，講道館へ最初に入門した外国人は，1893（明治26）年8月14日のイギリス人 H. M. Hughes である。このイギリス人入門者は，講道館が創設されて10年後に輩出したことになり，講道館はその創世期から日本人のみの閉鎖的な社会でなく，広く門戸を解放していた，換言すれば時代を先取りしていたともいえるのである。この点が嘉納師範の偉大なところである。

3. 講道館朝鮮支部の創設と変遷

1） 講道館朝鮮支部の誕生

1882（明治15）年に講道館が創設されて以来，各地にその分場が設立された。最初に講道館の支部たる分場が設立されたのは，1887（明治20）年10月の静岡県韮山分場であった。その後，海軍兵学校の江田島第一分場，東京の麹町分場，京都分場，熊本講道館，東京の牛込分場，静岡分場の義正館と続き，8番目の分場として京城に「朝鮮支部」が設立されるのである[35]。その設立は，大正6（1917）年11月15日のことであった。翌大正7年9月30日に「財団法人講道館朝鮮支部」となる[36]。この「朝鮮支部」の設立の経緯について，初代支部長の美濃部俊吉（当時朝鮮銀行総裁）は，大正7年10月6

日に京城中学校で開催された「朝鮮支部」の開所式に嘉納師範を迎え，その式辞で大略つぎのような趣旨のことを述べている。

「支部設置は，講道館柔道が朝鮮半島にもたらされて以来，京城に住んでいた有段者の人達の長い間の願望であった。大正3（1914）年秋に元臨時土地調査局員・福尚志二段は，元警察練習所柔道教師・肝付宗次を補佐として講道館柔道研究会を設置し，講道館柔道の組織化を図った。その後，支部設置の計画は，在京城有段者たる小田省吾，遠藤柳作，宮館貞一，岡村豊作，肝付宗次らの尽力によって，大正6年11月15日付をもって嘉納師範の承諾を得て設立された」[37]

と語っている。

大正6年12月6日には，事務所を京城府観水洞145番地（現鍾路区観水洞）の肝付宗次[38]宅に置く運びとなった。

「朝鮮支部」設置後の大正6年12月20日より，朝鮮駐箚憲兵隊司令部の道場を借用して稽古が開始された。この支部設置にともない，講道館柔道研究会は発展的に解消され，従来の柔道研究会会員は支部会員となった。この憲兵隊司令部道場での稽古は約6カ月間続いたが，「朝鮮支部」は，翌大正7年6月9日に京城黄金町二丁目にある朝鮮貴族会館（現乙支路二街，韓国外換銀行本店付近）の構内にある旧大正倶楽部の建物を購入した。この建物を改築して，59畳の道場の他に，27畳の控室を設置した。この建物が黄金町道場である[39]。

先にみた「朝鮮支部」の開所式は，設立1年後の大正7年10月6日[40]に嘉納師範を迎えて[41]，黄金町道場でなく京城中学校の道場で行なわれた。この時期には，すでに黄金町道場が完成していたが，この道場の広さは59畳であり，京城中学校の132畳と比べると，半分近くの広さしかなかったことが，この京城中学校で開所式を挙行した理由と思われる。

こののち10年近くは，上記の朝鮮貴族会館内に支部道場があったが，昭和3（1928）年5月27日に長谷川町111番地（現中区小公洞111番地）に「朝鮮

支部」道場が新築された[42]。長谷川町道場の誕生である。

長谷川町道場の敷地500坪は，すべて李王家の所有で，建坪は220坪，道場は314畳[43]，という。また李景錫十段は，

「敷地面積は373坪1勺，建坪は224坪，道場は220畳で，他に付属施設として，玄関を入ると左右に木造2階建ての合わせて40坪の部屋があった」[44]

という。両者には食い違いがみられるが，いずれにしても本格的な大道場といえる。

このように，昭和3年に新設された「朝鮮支部」道場は，1945年8月の敗戦まで京城の中心地に朝鮮柔道の殿堂として君臨するのである。

2） 四大道場の解散と「朝鮮柔道連盟」の設立

朝鮮体育会（現大韓体育会）は，1920（大正9）年7月13日に創立された。しかし，戦時体制に入った日本は，1938（昭和13）年9月3日付でこの朝鮮体育会を強制的に解散させ，日本人の体育団体である朝鮮体育協会に所属せしめた。

当時の京城には，四つの私設道場があったことは，すでにみたとおりである。それらの道場名は，中央基督教青年会，朝鮮武道館，朝鮮講武館，朝鮮研武館であった。しかし，これらの朝鮮人経営の道場も，上記でみたような戦時体制の強化，内鮮一体という名目の下に解散させられ，1938年7月1日から「朝鮮支部」に統合されることとなった[45]。

この統合にともない，1938年7月22日に「朝鮮支部」の篠田治策支部長，阿部文雄，古沢勘兵衛など合わせて8名と朝鮮側の姜楽遠（朝鮮武道館），韓軫熙（朝鮮講武館），張権（朝鮮基督教青年会），李景錫（朝鮮研武館）のいわゆる四大道場主4名と会合をもち，つぎに掲げる5項目を確認するのである[46]。

1. 各道場は，各々講道館朝鮮支部道場と称すること
2. 道場主は，その道場の取締となること

表6　1938年当時の京城府内の四大道場

道場名	設立年度	師範名	住所	現住所	職業
基督教中央青年会	1909年	張　権	京城府 鍾路25	서울특별시 종로구　종로2가	基督教中央青年会 柔道師範
朝鮮武道館	1921年	姜楽遠	苑西町175番地	종로구　원서동	延禧専門学校（現延世大学）教授
朝鮮講武館	1923年	韓軫熙	慶雲町70番地	종로구　경운동	中央中学校教師
朝鮮研武館	1931年	李景錫	寿松町56番地	종로구　수송동	普成専門学校（現高麗大学）教授

注(1)　李学来『韓国柔道発達史』1990年，164頁参照。
(2)　『大京城明細図』昭和16年参照。
(3)　『수도권지도』1989年参照。

3. 道場主は，講道館斡旋の担当者を兼ねること

4. 各道場で養成した門弟の昇段は，各道場主の推薦によって，講道館朝鮮支部から昇段審議会に提出すること

5. 各道場の経費は，各々独立してその道場主が経営すること[47]

以上のような経緯を経て，朝鮮人経営の柔道場は，当局の干渉をうけ運営と指導における主体性や独自性が喪失していくのである。そして，従来の組織を解散して，講道館の指導と監督をうけるようになる[48]。

しかし，これら四大道場に対する統制もこの統合から7年後の日本の敗戦によって中止となった。敗戦の年の9月15日，先に朝鮮総督府によって解散させられた道場主4名と新たに加わった警察署の代表者を合わせた10名が発起人となり，市内のYMCA会館に有段者60余名が集り，朝鮮の柔道を一つに組織するための設立総会を開いた。この総会の結果，柔道団体の名称を「朝鮮柔道連盟」とし，その本部を「朝鮮支部」に置くことを決定した。そして，初代会長に李範奭（이범석），副会長に韓軫熙を推戴する。早くも，日本の敗戦の翌9月には柔道の全国組織体である「朝鮮柔道連盟」が結成せられたことになる。

しかし，結果的には，「朝鮮支部」は「朝鮮柔道連盟」の本部道場にならず，私設道場の一つである「朝鮮研武館」の道場になるのである。

3） 講道館朝鮮支部の朝鮮研武館への移管[50]

「朝鮮支部」は，1918年9月の財団法人化以降敗戦の年までに，理事陣が4回入れ替った。敗戦の年の9月26日に開催された理事会の構成員は，小田省吾，林繁蔵，阿部文雄の3者であった。同日付で李景錫は，京城地方法院に財団法人理事変更登記申請書を提出している。この申請書の提出に先立つこと2日前の9月24日，上記の李と阿部は，「朝鮮支部」の李への引渡しに関する覚書を取り交わしている。この覚書は，5項目より成っているがこのうち，3項目を紹介してみる。

「一，今般財団法人講道館朝鮮支部理事小田省吾，林繁蔵，阿部文雄は辞任して評議会[51]から新しく李景錫，李景溱，裵庚烈を理事へ推薦した。

一，講道館支部が存続する期間は，現在の敷地が李王職から無料で借用できたが，それが存続しないときは，李王職に返還する義務があることを新理事は理解すること

一，従来の講道館朝鮮支部の経営は，本日で終了し庶務会計等を一切引き受け，将来の経営は新しい理事の方針により新しく発足するようにすること」

少し後先が逆になったが，先の申請書の提出の結果，理事陣は日本人からすべて朝鮮人に変更され，新たに李景錫，李景溱，裵庚烈の3者が就任した。1945年10月10日の新理事会において「朝鮮支部」の名称を「財団法人朝鮮研武館」と改称し，従来の「朝鮮ニ於ケル日本柔道ノ発達普及ヲ図リ国民ノ心身鍛練ニ資スル」（「財団法人講道館朝鮮支部寄附行為」第一条）という目的を「朝鮮柔道の普及奨励と国民の心身鍛練」に改めた。同時に，借地たる敷地は，李王家に返還され文化部文化財管理局の所管となった。これらのことによって，「朝鮮支部」は日本人より正式に朝鮮人に移管がなされたことになる。

このような経緯で，「朝鮮支部」は，李景錫が主宰する「朝鮮研武館」へ移管がなされる。この移管は，柔道の全国的組織である「朝鮮柔道連盟」でなく，なぜ私設道場の一つに過ぎない「朝鮮研武館」への委譲となったのであろうか。この点については不明なところが多く，真相が明らかにされていないので，この程度に留め置くことにする。

したがって，解放日の翌月に設立された「朝鮮柔道連盟」は，こののち道場のない名前だけの団体として2年間を過さなければならなかった。しかし，1947年7月にソウル特別市の乙支路1街63番地（現産業銀行の裏側）にあった塾を改築し「朝鮮柔道連盟」の中央道場とした。この道場が，解放後における「朝鮮柔道連盟」の最初の中央道場となる[52]。

4） 大韓柔道会と韓国柔道院の設立

1950（昭和25）年6月25日，朝鮮動乱（6•25事変）が勃発する。この動乱の最中，先に分裂をした「朝鮮柔道連盟」と「朝鮮研武館」は統合し，その統合名称を「大韓柔道会」と改称した[53]。この「大韓柔道会」への統合は，旧講道館朝鮮支部の建物・道場を「朝鮮研武館」より「大韓柔道会」に移管するための合意であった。しかし結果的には，この合意を書類にしておかなかったために，翌1951年1月4日の朝鮮民主主義人民共和国軍のソウル再侵攻の混乱で反古となるのである。

足かけ3年に亘って続けられた動乱も，1953年7月の休戦協定によって停止した。旧講道館朝鮮支部の所有者である「朝鮮研武館」の関係者よりも一足先にソウルへ戻った「大韓柔道会」の関係者は，「朝鮮研武館」を無断で占有し，そこに「大韓柔道会」という看板を掲げるのである。

これ以降，「大韓柔道会」側と「朝鮮研武館」側とは，旧講道館朝鮮支部の帰属をめぐって，3年もの法廷闘争を繰り広げるのである。再び，韓国柔道界は混乱する。

しかしこの混乱も，「大韓柔道会」側の「日帝時代の資産は個人の財産に

することができない」[54]という主張や李景錫などの理事陣の任期満了退任ということもあり，1955年12月16日には，新たに韓軫熙（大韓柔道会初代副会長・故人），石鎮慶（大韓柔道会十段・故人），朴正俊（現大韓柔道会九段）の3者が新理事として就任する。新理事は就任と同時に，1954年7月23日に，「財団法人・朝鮮研武館」から「講道館朝鮮支部」と変えた名称を，再び「財団法人・講道館朝鮮支部」と変更し，理事名でソウル地方院への登記を完了する。ここに，旧講道館朝鮮支部は，「大韓柔道会」の所有となるのである。翌1956年2月11日，再度の法人名称の変更がなされ，「財団法人・韓国柔道院」と改称する。この間も両者間で法廷闘争が展開されるが，1957年6月13日「大法院」の判決が下り，「韓国柔道院」の勝訴となり，完全な結着をみることになる[55]。

再び前後するが，朝鮮動乱の休戦協定が結ばれる少し前の1953年6月に「大韓柔道会」は，柔道の中堅指導者の養成を目的として，旧講道館朝鮮支部に2年制で定員100名の大韓柔道学校（現大韓体育科学大学）を創設した。1970年4月にソウル江東区風納洞へ移転するまでの17年間，旧講道館朝鮮支部に大韓柔道学校が存在したことになる。

1968年文化部文化財管理局は，大韓柔道会と大韓柔道学校の二つの組織が共用して使用していた旧講道館朝鮮支部の敷地を愛敬油脂に売却した。この売却によって，大韓柔道会は借地権の保障が得られ，その保障金などによって，1971年6月，汝矣島（여의도）に，2410坪の土地を購入した。1975年7月その土地に大韓柔道会の中央道場として，韓国柔道会館を創設し現在に至っている。

旧講道館朝鮮支部の土地と建物を購入した愛敬油脂は，のちにこの土地を巨亀荘へ売却する。巨亀荘は，道場の内部を修繕改築して，この建物を食堂にした。その後この食堂は，火事となり，今はその跡地に当時の面影を何も見いだすことができない。現在その地は，ソウルプラザホテルの駐車場となっている。

このように旧講道館朝鮮支部には，一時期大韓柔道会と大韓柔道学校が一つ屋根の下に共存していたことになる。言い換えれば，旧講道館朝鮮支部は，大韓柔道会と大韓柔道学校の揺籃期に深い係わりを有していたことになる。

おわりに

周知のように，日本と朝鮮との関係は，室町時代から江戸時代の末期まで，豊臣秀吉の朝鮮出兵の時期を除いては，対等な善隣外交がなされてきた，といえる。

ところが明治となり，1875（明治8）年の江華島事件後の1876（明治9）年に不平等条約たる日韓修好条規を結び，これまでの対等互恵の関係が崩れ始める。

この条規は12条よりなるが，このなかの1条に釜山のほか仁川，木浦，群山などの開港について決められている[56]。

「朝鮮半島ニ始メテ斯道ノ伝播セラレシハ明治三十九年ノ頃ナルガ如ク（下略）」[57]とあるように，朝鮮へ近代柔道が伝えられたのは，1906（明治39）年頃であり，京城のみならず，日本からの最初の上陸地である港町・仁川などにも道場が設けられた可能性がある。『京城柔道発達史』によると，「現に仁川では，京城と前後して，大藪某（他流）来ってその地に道場を創め，その後稲川次郎氏同地の警察署に出で教授したと聞いている」[58]とある。しかし実際には，資料もなく，京城以外の道場開設を検証する手だてはない。同様に，すでにみた内田や青柳を朝鮮の近代柔道の鼻祖とする二説についての真偽は，韓国論文に頼るほかはない。

韓国論文のうち，李瑄根，羅絢成，林栄茂，鄭三鉉は，1907年の青柳説を，李学来，李洪鍾は1906年の内田説を支持している。しかし，これらの論文は，その説が何に依拠しているのかを明確にしていない。ただ，近代柔

道がもたらされた年度と氏名を記しているのみで，その説を傍証する資料や出所を一切明らかにしていない。言い換えれば，論拠があまりにも不十分で，曖昧である。事実の解明には，主観でなく，客観的な史実に基づいた論考をしなければならない。

以上のような観点に立って考えると，韓国論文にみる既成の二説は，著しく信憑性が失われることになり，再検討が求められよう。

1906年に日本人から近代柔道を学ぶ以前に，8名もの韓国人が講道館に入門している。この8名のうち，3名については，不十分ながらその経歴が明らかにできた。このうち，全永憲のみは，留学中に長く柔道を修業した可能性が考えられるし，帰国後は，陸軍武官学校の教官を務めている。

李済晃（이제황）は，「1909年にキリスト教青年会に柔道班を設け，柔道を実施したのは，李商在（이상재）先生の提唱によるもので，その指導を武官学校出身の劉根洙と羅寿永に委嘱した」[59]という。すでにみたように，全永憲は，1904年7月に帰国し，同月に武官学校学徒隊付教官に就任している。したがって，彼と劉および羅とは，少なくとも柔道が介在する武官学校の同窓生としての係わりを見出すことができよう。

とすると，彼が朝鮮に，日本で学んだ柔道を最初に伝えた人物，という可能性が生じてくるのである。

以上にみたように，先達の論文からは，朝鮮へ近代柔道を最初に伝播した人物を特定することができない。しかし，伝播した時期については，20世紀の初頭に日本から伝えられた，との結論が導き出されよう。

1910年の日韓併合時には，もうすでに日本人経営の多くの道場が京城に設立されていて，1917年11月の「朝鮮支部」の創設によって，講道館柔道の土台は盤石のものとなる。結果的に，朝鮮への講道館柔道の進出は，日本による朝鮮の植民地化と歩を同じくしているように思われる。

日韓併合頃までは，講道館のみならず柔術諸流派も多く渡朝したことは，すでにみたとおりである。しかし，講道館の内田にしろ，双水執流の青柳に

しろ，組織性のない個人的な経営であり，一過的に消滅せざるをえなかった。嘉納師範の講道館柔道は，強固な組織と指導体制が確立していて，質量とも圧倒的に勝れ，他の追随を許さなかった。このことが，朝鮮における講道館の立場を盤石のものとした。

実のところ朝鮮には，講道館系のみならず，大日本武徳会系の柔道も主に警察畑を中心にして，大きな力を持っていた。本稿では，一切触れることができなかった。他日を期して究明してみたい。

〔注〕

1）「朝鮮」の用語についてお断わりしておく。

周知のように，李朝の国王・高宗は，1897年10月に国号を李氏朝鮮より大韓帝国と改めた。この国号・韓国は，1910年8月の日韓併合まで続いた。併合以降，我が国においては，1948年8月15日の大韓民国，同年9月9日の朝鮮民主主義人民共和国の樹立までの国号を朝鮮と呼称した（「韓国ノ国号ハ之ヲ改メ爾来朝鮮ト称ス」〔明治43年8月29日，勅令第318号〕）。したがって，本稿が係わる時代のうち，1910年までの半島全体を原則として韓国または韓国人，これ以降1948年までを朝鮮または朝鮮人そして両者にまたがる場合は，朝鮮と表記する。

2）大韓体育会『体育百科大辞典』芸文館，1972年，287頁。

3）拙稿「柔道伝来説小考」，『岐阜経済大学論集』第22巻第2・3号，1988年，249—279頁。拙稿「韓国柔道発達史小考」，『柔道』平成3年5月号，71—74頁。

4）『京城新聞』明治41年11月7日，第104号。

5）李瑄根『大韓国史』新太陽社，1980年，309頁。

6）申元永編『韓国体育百年史』新元文化社，1981年，137頁。

7）大韓体育会『大韓体育会史』1965年，57頁。

8）서울師大体友会『羅絢成博士回甲紀念論文集』1976年，144頁。

9）林栄茂『韓国体育史新講』教学研究社，1985年，207頁。

10）鄭三鉉『日帝武断統治期의韓国体育史研究』（博士学位論文），1990年，120頁。

11）『武徳会誌』第9号，明治43年，105頁。

12）『武徳会誌』雄松堂，昭和60年復刻，105頁参照。

13）山本義泰「双水執流組討腰之廻について」，『天理大学学報』第33巻第4号，昭和57年，27頁参照。

14）松本芳三編『柔道百年の歴史』講談社，1970年，117頁参照。

15）이학래『韓国近代体育史研究』지식산업사，1990年，101頁。

16）李洪鍾『한국유도사』漢江文化社，1984年，205頁。

17）『京城日報』の昭和2年2月2日から6日までの6日間，阿部文雄（当時講道館朝鮮支部幹事長）名の論文「京城柔道発達史」が6回シリーズで連載されている。実は，このシリーズ連載前の大正7年発刊の『柔道』（第4巻第10号）に同じ題目で，内容もほぼ同じ論文が小田省吾（当時講道館朝鮮支部幹事長，昭和2年当時は，講道館朝鮮支部理事）名ですでに発表されている。

阿部は，「朝鮮に於ける講道館柔道の歴史は，曩に当支部設立者三段小田京城帝大教授竝に不肖のものしたる『京城柔道発達史』に詳説した通りであるから……」（『作興』第7巻第7号，昭和3年，39頁）と述べている。この阿部見解を額面どおりに受け止めるならば，両者の共著でなくてはならない。

先の『柔道』には，昭和2年2月1日付で『京城日報』に記載された「京城柔道発達史 ㈠」だけは，掲載されていない。この㈠につぎのように記されている。「昨年12月，東京なる講道館の支部がこの地に設立せられて以来僅に半年なるに……」（力点―引用者）。

大正6年11月15日に講道館朝鮮支部が創立される。同年12月6日に，肝付宗次宅へ事務局が置かれる。したがって，文中の「昨年12月」は，昭和元年でなく，大正6年12月を指している，と考えるべきである。すなわち，この論文は，大正7年当時に綴られたもの，といえる。この根拠を，両論文よりもう少し例を挙げて補強してみよう。

① 大正7年10月当時，波来谷乗勝と吉武雄一は講道館朝鮮支部の世話役をしていた。小田論文には，この肩書がついているが，阿部論文は，その肩書が削除されている。時期が合わないからであろう。

② 小田論文には，肝付について「本年5月病を以て其の職を辞するに至り……」（力点―引用者）とあるのを阿部論文では，「本年5月」を削除している。昭和2年に，病を得たのではないからであろう。

③ 京城倶楽部柔道部の説明で，小田論文は「其の柔道部は，本年を以て……」（力点―引用者）とあるが，阿部論文では，「其の柔道部は，大正7年を以て……」と訂正されている。

また，この論文が発表された大正7年当時の講道館朝鮮支部役員名簿には，阿部の名は見当たらない。つまり，「京城柔道発達史」が『柔道』に掲載された頃，阿部は朝鮮に在住していなかったかそれとも講道館朝鮮支部に係わっていなかったことになろう。すなわち，昭和2年の阿部論文は，大正7年当時に綴られたもの，言い方を換えれば，阿部との共著でなく，実質は小田によって綴られた論文，ということになる。

では，なぜ昭和2年には，阿部単著での投稿となったのであろうか。残念ながら，この理由は推論できない。

18）『京城日報』昭和2年2月2日，第6889号。

19）同上。

20）『講道館館員名簿・第一』発刊年月不記載，68頁。

21）初瀬龍平『内田良平の研究』九州大学出版会，1980年，97，375—376頁参照。黒龍倶楽部『国士内田良平伝』原書房，昭和42年，720—725頁参照。

22）黒龍倶楽部，同上書，43頁参照。

23）初瀬龍平，前掲書，97頁参照。

24）『京城日報』昭和2年2月2日—6日参照。『柔道』第4巻第10号，大正7年，30—39頁参照。

25）同上誌。

26）『高宗純宗実録・下』探求堂，1979年，422頁。

27）李洪鍾，前掲書，18頁。

28）同上書，206頁。『皇城新聞』1908年3月28日，第2736号。

29）前掲『大韓体育会史』57頁参照。

30）李済晃『新柔道』受賞界社，1976年，22頁。『東亜日報』1934年3月3日，第4752号。

31）李瑄根，前掲書，309頁。

32）前掲『講道館館員名簿・第一』160，161，169，180頁。

33）『韓国史料叢書・第17』628頁。李学来『韓国柔道発達史』保景文化社，1990年，37—38頁参照。李洪鍾，前掲書，203—204頁参照。

34）工藤雷介『秘録日本柔道』東京スポーツ新聞社，昭和47年，58頁。

35）「柔道家としての嘉納治五郎」(十)，『作興』第6巻第10号，昭和2年，30頁参照。

36）『有効の活動』第5巻第2号，昭和9年，70頁。

韓国の資料によると，1918（大正7）年9月18日に財団法人講道館朝鮮支部が設立された，とある（財団法人韓国柔道院『沿革』発刊年月不記載）。

37）前掲『有効の活動』69—70頁参照。

38）肝付宗次は，鹿児島県姶良郡の出身で，23歳の明治21年12月24日に講道館へ入門した（『講道館館員名簿・第一』27頁）。講道館に入門する以前は，大阪の半田弥太郎という天神真楊流の門下生であったので，入門時にはすでにそれなりの実力者であった，と思われる。

明治23年には，佐藤法賢の後任として，海軍兵学校の柔道教師となっている（『海軍兵学校沿革』原書房，466頁）。また翌明治24年には，熊本の第五高等中学校（現熊本大学）の校長となった嘉納師範の助手として同校へ赴き，生徒に柔道の指導をする（『嘉納治五郎』布井書房，685頁）。このように，肝付は嘉納門下の高

弟として信頼も厚いことが分る。

肝付は，大正7年10月に六段となる（『嘉納治五郎大系』第13巻，本の友社，1988年，305頁）。この当時，のちに十段となる山下義韶，磯貝一，永岡秀一は七段，三船久蔵は同じ六段，田畑昇太郎，岡野好太郎は五段である。この時代の六段である。大正中期における，朝鮮在住の柔道家のなかでは，最高段位である。

大雑把であるが，肝付についてはこのくらいしか分らない。

しかし，朝鮮における明治末から大正の中期頃までの各種道場での柔道指導および道場開設には，必ず彼が係わりをもっている（表2，3参照）。大正7年5月に病気（55歳くらいの時）となって警官練習所の教官を退いたのちの10月，講道館朝鮮支部の指南役と評議員に就任する。これ以降のことは分らない。

しかしながら，彼が朝鮮における講道館柔道の創世期に，柔道の普及・発展に尽した貢献は大なるものがあり，内田良平や青柳喜平の比ではない，といえよう。

39）『柔道』第4巻第10号，大正7年，42頁。

他にこの黄金町道場の広さを70畳としている資料もある（『財団法人講道館朝鮮支部紀要』昭和40年，59頁）。

40）当時の会員の数は，どのくらいであったであろうか。

大正7年7月現在における「講道館朝鮮支部」の会員は423名である。そのうち，29名が朝鮮人で，残りはすべて日本人である。有段者は40名であるが，すべて日本人であり，最高段位は，五段で1名，となっている。この五段は，同年10月に六段に昇段する肝付宗次である（『柔道』第4巻第10号，大正10年，44頁参照）。

昭和2年4月になると，有段者は251名となる。内訳は，五段6名，四段24名，参段39名，弐段59名，初段123名である（前掲『財団法人講道館朝鮮支部紀要』56頁参照）。

他方，1931年頃の姜楽遠の「朝鮮武道館」の道場の広さは21畳で，門弟はほぼ1000名に達した，という（『東亜日報』1934年3月7日，第4756号）。門弟のすべてが朝鮮人であるかどうかは不明であるが，1921年の創設以来の延べ人数だとしても，かなりの人数といえる。

41）1928（昭和3）年第9回オリンピック・アムステルダム大会でのIOC委員会等に出席のため嘉納師範は，シベリア経由で欧州へ向う途中，この長谷川町道場新築落成式に出席し，講演の他に昇段式，各種形の披露を執り行なった（前掲『嘉納治五郎大系』第13巻，117頁参照）。

42）同上，117頁。

43）『作興』第2巻第6号，昭和7年，43頁。

44）李景錫十段は，1906年10月6日に韓国慶尚南道陜川で誕生し，本年で86歳と

なる。日本の中央大学法学部英法科を1930年3月に卒業。帰国後の1931年1月17日にソウル市内に朝鮮研武館を創設する。1990年11月30日に柔聖となる（『柔道』제18호，1991年，13頁参照）。

筆者は，1991年2月12日（火）と1991年12月26日（木）の2回，先生のお宅やソウル市内のホテルでお会いしたが，たいへんご健在であられた。

45） 李学来，前掲書，163頁。

46）『朝鮮日報』昭和14年2月11日（土）に，四大道場主の五段昇段についてつぎのような記事（要約）がみられる。

「この国に武道が輸入されて以来，半島の青少年たちのために，いろいろな苦労を味わいながら，ひたすら武道精神の涵養と体位の向上に尽力してきた。市内の私設道場の師範たちは，去年（昭和13年―引用者）各道場が東京の講道館の朝鮮支部に合流された後，同支部との緊密なる連絡を取ってきたが，柔道界の功労者として，

朝鮮武道館　姜楽遠
中央基柔道部　張　権
朝鮮講武館　韓彰熙
朝鮮研武館　李景錫

に講道館から五段に昇段したという段証が送付されてきたそうだ。」

47） 李学来，前掲書，164頁。

48） 李景錫十段によれば，講道館への統合は，大日本武徳会柔道との二者択一であり，四大道場主の協議の結果，講道館への所属を決定した，とのことである（1991年12月26日〔木〕談）。

49） 前掲『大韓体育会史』367頁。

50） 李学来，前掲書，163―166頁参照。

51） 評議員会の誤り，と思われる。財団法人講道館朝鮮支部寄附行為第6条に「理事ハ評議員会ニ於テ之ヲ選挙シ其ノ任期ヲ三年トス」とある。

52） 道場の広さは，80枚敷きとある（前掲『大韓体育会史』368頁）。

53） これより先の1948年7月の制憲国会は，国号を大韓民国とした。大韓民国の成立によって，これまでの「朝鮮体育会」は「大韓体育会」と改称した。

54） 李学来，前掲書，171頁。

55） 同上書，174頁。

56） 姜在彦『朝鮮近代史』平凡社選書，1986年，131頁。

57） 前掲『財団法人講道館朝鮮支部紀要』2頁。

58）『京城日報』昭和2年2月2日，第6889号。

59） 李済晃，前掲書，22頁参照。

〔付　記〕

本稿の執筆にあたり，とくに『講道館館員名簿・第一』および『財団法人講道館朝鮮支部紀要』については，福島大学中村民雄先生所蔵の「民和スポーツ文庫」の資料を利用させていただいた。記して感謝の意を表したい。